# 『三國志演義』の執筆プロセスに關わる考察

井口千雪

## はじめに

『三國志演義』（以下『演義』と略稱）という小説は、いったいどのようにして執筆されたのか。その成立過程について、未だ明確な答えは出されていない。一般的には原作者は元末明初（一三六八年前後）の戲曲作家・羅貫中とされているが、この人物についての詳しい足跡は不明であり、どのような動機で、どのような手法でこの小説を執筆したのかも明らかになっていない。また、現存する『演義』の最古の版本とされるのは明の嘉靖年間に出版されたと考えられている所謂「嘉靖本」であるが、羅貫中が生きた元末明初からは百五十年ほども隔たっている。この空白の時期に『演義』はどのような變容を辿ったのだろうか。

講史小説の黎明期とも言える時代に、どのような手法でこの小説が執筆されたのか、これを解明するのは容易なことではない。しかし、『演義』のあらすじは元の至治年間（一三二一―一三二三）に建陽の虞氏から出版された『全相平話三國志』（以下『平話』と略稱）を概ね踏襲していることから、そのような讀み物を手にした何者かが、それを發展させたようなものを書いたのが『演義』の始まりであったことは推察される。また、近年の研究では、『演義』の本文には西晉の陳壽による正史『三國志』（裴松之注を含む）、北宋の司馬光による『資治通鑑』、南宋の朱熹による『資治通鑑綱目』（以下『綱目』と略稱）といった歴史書の文章が流用されており、『演義』執筆の際にこれらの歴史書が參照されていたことが明らかになってきている。[1]『三國志』（裴松之注を含む）は三國時代について最も詳しい記述を持つ書であるから、作者が『演義』執筆の際にこれを參照したのは當然のこととも いえよう。『資治通鑑』については、版本によってはその影響が認められるが、ごく少例であり、增補・書き換えの目的で遲れて利用された可能性が高い。[2]『綱目』という書物は『資治通鑑』をダイジェスト化したもので、『資治通鑑』が二百九十四卷であるのに對し、五十九卷と比較的コンパクトになっている。事件の概要を項目立てて大書し、その後に詳細を小書するという體裁をとり、各事件の概要と詳細が一目でわかるので、歴史小説を執筆するにあたり有用な參考書として求められたものと考えられる。

これらの素材を驅使して、『演義』という小説はどのように執筆されたのか。『演義』、『平話』、各歴史書の記述を詳細に比較することで、

その執筆プロセスを解明し、『演義』誕生の謎に迫りたい。

## 一

まずとりあげたいのは、『演義』序盤で際立った精彩を放つキャラクター、呂布が最期を迎えるくだりである。「呂布敗走下邳城」「白門樓曹操斬呂布」（葉逢春本第二卷第十三段・十四段。ちなみに『演義』の早期の版本としては、明・嘉靖年間に出版されたと考えられている所謂「嘉靖本」〔嘉靖元年の序を持つ〕と葉逢春本〔嘉靖二十七年の序を持つ〕が擧げられるが、葉逢春本の方が歴史書の文章に近いという傾向が見られ、古い『演義』の文章を繼承していると考えられるので、本論では『演義』の底本として葉逢春本を使用する[3]）の二段であるが、あらすじは概ね『平話』と一致していることから、『演義』の原作者が執筆の際に『平話』のような書物を土臺としたであろうことは想像に難くない（ただし今日傳わる『平話』そのものではなく、似たような内容を持った別の書物が利用された可能性もある。本論では便宜上今日傳わる『平話』を利用したとして論を進めることにする）。しかし、無論、『平話』と『演義』は完全に一致しているわけではない。例えば、侯成が呂布に謀反を企てる部分は『平話』と『演義』で話の展開が大きく異なっている。『演義』では侯成が呂布に謀反心を抱くきっかけとなったのは馬盗人の事件である。盗まれた馬十五頭を侯成が奪回したところ、諸將から禮として酒と肉を贈られるのだが、呂布は「おまえは諸將と酒を飲み交わして兄弟の契りを結び、皆と謀って私を討つつもりだな。」と怒り、理不盡にも侯成を斬首に處そうとする。諸將のとりなしで五十回の棒打ちで濟んだものの、侯成はこの事件をきっかけに呂布に謀反心を抱いた。だが、このようなエピソードは『平話』には存在しない。何に基づいているのかというと、歴史書、特に『三國志』裴松之注に由來する。以下に示すように、『演義』と『三國志』裴松之注では文字の一致が高い確率で認められ（網掛け部分）、それ以外の部分も、言い回しが若干異なっているだけで内容はほぼ同じである。以下、本文を引用する際、『演義』葉逢春本を（葉）、『三國志』及び裴松之注を（三）（注）、『資治通鑑』を（資）、『綱目』を（綱）、『平話』を（平）と表す。本文對比には譯を付さない。

（葉）侯成有馬十五疋被後槽後人商議盗去、獻與玄德。侯成知覚、赶上奪回、盡将後槽殺之。諸将合礼、與侯成作賀、釀五六斛酒、臘十餘類猪頭、未敢先飲、侯成持酒五斛、猪一口、入詣布前、跪下告曰、「托将軍虎威、追得失馬、衆将皆来相賀、釀得少酒、臘得数豚、未敢飲、先奉微意。」布大怒曰、「吾禁酒、汝釀酒、諸将共飲作弟兄、同謀伐我耶。推轉斬之。」高順等入告、布怒曰、「故犯吾令、理合斬首、看諸将面、且打一百。」哀告、打了五十背花。成歸、盡棄其酒。衆皆為此心変。

（三）太祖塹圍之三月、上下離心、其將侯成・宋憲・魏續縛陳宮、將其衆降。

（注）『九州春秋』曰、初、布騎將侯成遣客牧馬十五匹、客悉驅馬去、向沛城、欲歸劉備。成自將騎逐之、悉得馬還。諸將合禮賀成、成釀五六斛酒、臘得十餘頭豬、未飲食、先持半豬五斗酒自入詣布前、跪言、「閒蒙將軍恩、逐得所失馬、諸將來相賀、自釀少酒、臘得豬、未敢飲食、先奉上微意。」布大怒曰、「布禁酒、卿釀酒、諸將共飲食作兄弟、共謀殺布邪。」成大懼而去、棄所

釀酒、還諸將禮。由是自疑、會太祖圍下邳、成遂領衆降。（卷七　魏書七「呂布傳」）

（資）布將侯成亡其名馬、已而復得之、諸將合禮以賀成、成分酒肉先入獻布。布怒曰、「布禁酒而卿等醞釀、爲欲因酒共謀布邪。」成忿懼、十二月、癸酉、成與諸將宋憲・魏續等共執陳宮・高順、率其衆降。（卷六十二　漢紀五十四　獻帝建安三年）

（綱）十二月、布將魏續等共執陳宮・高順、率其衆降。（卷十三）

『資治通鑑』の記述は『演義』に比べて遙かに簡略であるし、『綱目』には侯成の名前すら出ていないことから、これらが利用された可能性は考えられない。『演義』の作者は執筆の際、他でもない『三國志』裴松之注を參照していたのである。

ただし『三國志』裴松之注には、『演義』波線部のような呂布が侯成を棒打ちにしたという記述は見えない。これに關しては、『平話』に侯成が棒打ちにされるという記述があり、これが『演義』に影響しているものと考えられる。以下に『平話』の該當箇所を擧げる。

（平）前後半月、忽一日、見數人揭簾而入。呂布認得是陳宮・侯成・張遼等。內有侯成言与呂布、「自臨洮相逐、到今數載、尙無立錐之地。外有曹相・劉備兩軍勢甚、兼沂・泗兩河浸下邳、粮食闕少、遲疾困破下邳、衆人皆死。温侯每日与貂蟬作楽。」呂布笑曰、「来者曹操・劉備、豈不識我。如城被沂・泗兩河、吾有馬名赤兔、我与貂蟬坐騎而去、馬能越塹、与貂蟬浮水而出、吾何懼哉。」內中一人高叫罵、「呂布出身寒賤、自言却与貂蟬浮水而去。我兵將及三万、城內百姓約計三万戶、若何。」言未尽、又罵。呂布覷是侯成、言推轉交斬。衆官勸得免性命、打三十棒。呂布歸堂、衆官皆散。（卷上）

『平話』では酒色に耽る呂布に諫言したことが原因で呂布の怒りを買ったとなっており、話の展開は『演義』とはかなり異なっているが、波線部のように、斬首されそうになったところを諸將がとりなす點、棒打ちに處されるという點では、『平話』と『演義』は一致している。このことから、『演義』で呂布が侯成を棒打ちにするのは、『平話』の名殘であると考えられる。

この後、侯成が呂布の赤兔馬を盜んで曹操軍へ投降する場面でも、『演義』は『平話』の名殘をかなり色濃く殘している。

（平）前後三日、衆官尙自不捨、侯成帶酒罵呂布。當夜直至後院。【侯成盜馬】見喂馬人大醉。侯成盜馬至于下邳西門、見健將楊奉言侯成盜其馬。被侯成殺了楊奉、奪了門、浮水而過。約至四更、関公巡綽侯成、得其馬。天明、見曹操、具說其事。曹相大喜。（卷上）

（葉）侯成暗来呂布馬院觀其動静、見後槽人皆睡、着殺死数人、騎赤兔馬走東門。魏續放出、佯作追〔赶之勢。来到〕操寨献馬。

※〔　〕內は葉逢春本では五字缺のため嘉靖本に據って補った。

傍線部のように、侯成が赤兔馬を盜む樣子の描寫は『平話』と『演

義』でかなり似通っている。侯成が赤兎馬を盗むという事件は歴史書には全く見られないものであることからも、『演義』が『平話』を繼承していることは明らかである。

以上のように、『演義』は『平話』のような書物を土臺として、その名殘を諸々に殘し、『三國志』（裴松之注を含む）の記述を盛り込みながら執筆されているのである。

さらに、この段のクライマックスともいえる、呂布が白門樓で曹操に斬られる場面がどのように執筆されたかを考察したい。まず、『演義』の記述は以下の通りである。侯成らの謀反により呂布は捕らえられ、曹操の前に引っ立てられる。

（葉）布叫曰、「縛太急、少緩之。」操曰、「縛虎不得不急也。」布曰、「容伸一言而死。」操曰、「且稍觧寛。」主簿王超曰、「不可。呂布豹虎也。其衆在外、不可寛也。」操曰、「本欲少緩、主簿不容耳。」布見侯成・魏續・宋憲皆立於側、布曰、「吾待衆將不薄、安忍反也。」宋憲曰、「汝听妻言、不用將計、安得為厚也。」布默然。…（高順、陳宮を斬る場面がある）…呂布與玄德曰、「公為坐上客、布為帳下虜、不能一言而相寛乎。」玄德點頭。操交押過呂布来。布曰、「明公所患、不過於布。布今已伏、天下不足憂。明公将歩、令布将騎、只天下不足慮也。」操回顧玄德曰、「呂布欲何如。」玄德答曰、「明公不見布之事丁建陽・董卓乎。」操點頭。布目視玄德曰、「是児最無信者。」操令牽下楼縊之。布回顧玄德曰、「大耳児。不記轅門射戟時耶。」

『演義』本文に破線①～⑥で示したように、この部分は以下のような六つの成分から成り立っている。

①呂布が縄を緩めるよう頼む。曹操は呂布を虎に喩える。
②縄を緩めようとした曹操を王超（歴史書では「王必」）が諫める。
③呂布の配下が呂布を裏切った原因についてのやりとり。
④呂布が劉備に口添えを懇願する。
⑤呂布が曹操を説得しようとする。
⑥劉備が呂布を斬るように勸め、呂布が劉備を罵る。

では、『三國志』及び裴松之注、『資治通鑑』、『綱目』の成分を、同様に破線と番號によって比較してみたい。

（三）遂生縛布、布曰、「縛太急、小緩之。」太祖曰、「縛虎不得不急也。」布請曰、「明公所患不過於布、今已服矣、天下不足憂。明公將歩、令布將騎、則天下不足定也。」太祖有疑色。劉備進曰、「明公不見布之事丁建陽及董太師乎。」太祖頷之。布因指備曰、「是兒最叵信者。」於是縊殺布。

（注）○『英雄記』曰、布謂太祖曰、「布待諸將厚也、諸將臨急皆叛布耳。」太祖曰、「卿背妻、愛諸將婦、何以爲厚。」布默然。
○『獻帝春秋』曰、布問太祖、…（中略）…布縛急、謂劉備曰、「玄德、卿爲坐客、我爲執虜、不能一言以相寛乎。」太祖笑曰、「何不相語。而訴明使君乎。」意欲活之、命使寛縛。主簿王必趨進曰、「布、勍虜也。其衆近在外、不可寛也。」太祖曰、「本欲少緩、主簿復不聽、如之何。」（巻七　魏書七「呂布傳」）

（資）布見操曰、「今日已往、天下定矣。」操曰、「何以言之。」布曰、「明公之所患不過於布、今已服矣。若令布將騎、明公將歩、天下

不足定也。」[4]顧謂劉備曰、「玄德、卿爲坐上客、我爲降虜、繩縛我急、獨不可一言邪。」操笑曰、[1]「縛虎不得不急。」乃命緩布縛、劉備曰、「不可。明公不見呂布事丁建陽・董太師乎。」操頷之。布目備曰、「大耳兒、最叵信。」（卷六十二　漢紀五十四　獻帝建安三年）

（綱）布見操曰、[5]「明公之所患不過於布、今已服矣。若令布將騎、明公將步、天下不足定也。」[6]操命緩布縛、劉備曰、「不可。明公不見呂布事丁建陽・董太師乎。」操頷之。（卷十三）

關係が複雑となっているため、左のように番號だけでそれぞれの構成を簡略に示して比較してみる。

（葉）①②③　④　⑤　⑥
（三）①　③注　④注　②注　⑤　⑥
（資）⑤④①⑥
（綱）⑤　⑥

こうして見ると、構成の面からも、記述內容の過不足の面からも、『演義』は『三國志』及び裴松之注と似通っていることが容易にみてとれる。特に構成については、『三國志』の本文の間に裴松之注を插入するだけで、『演義』とかなり近い構成になるのである。一方、『資治通鑑』には①④⑤⑥の記述しか無い上、順序もばらばらであり、『綱目』に至っては⑤⑥の記述しか無い。この呂布の最期の場面は、『三國志』及び裴松之注を利用して執筆された可能性が高いといえる。

ただし、『演義』④⑥文中に網掛けで示した「坐上客」と「大耳児」という語については、『演義』は『三國志』（裴松之注を含む）ではなく『資治通鑑』に一致している。「坐上客」は『三國志』裴松之注では「坐客」、『資治通鑑』では「坐上客」となっており、『演義』と『資治通鑑』が一致する。呂布が劉備を罵る臺詞は『三國志』では「是兒最叵信者」、『資治通鑑』では「大耳兒、最叵信」となっており、『演義』には「是兒最叵信者」（『演義』では「叵」が「無」になっているがここではほぼ同義）という語も「大耳児」という語も見えるのである。この問題については金文京氏も言及しておられ、[4]『演義』の文章は主に『三國志』を採りつつ、『資治通鑑』も參照していると指摘している（なお、金氏も指摘するように『資治通鑑』のこの部分の記述は『後漢書』卷一百五「呂布傳」の記述に據っているため、そちらが利用された可能性もある）。

さらに、「大耳児」については『平話』にも似たような語が見える。

（平）曹操言、「視虎者不言危。」呂布覷帳上曹操与玄德同坐。呂布言曰、「丞相倘免呂布命、殺身可報。今聞丞相能使步軍、亾能使馬軍、倘若馬步軍相逐、今天下易如番手。」曹操不語、目視玄德。先主曰、「豈不聞丁建陽・董卓乎。」【白門斬呂布】曹操言、「斬、斬。」呂布罵、「大耳賊、逼吾速矣。」（卷上）

『平話』は「大耳賊」、『資治通鑑』は「大耳兒」としているので、この語についてはやはり『演義』は『資治通鑑』を採用している可能性が高いが、全體の描寫自體は『平話』と『演義』はかなり似通っている。先に言及した侯成の場面と同樣に、この場面でも『演義』の作者が『平話』を參照していた可能性は十分考えられる。以上のことから、この呂布の最期の場面は、『平話』を下地として、一部『資治通鑑』の記述を採り入れつつ、主に『三國志』（裴松之注を含む）を利用する

というプロセスで執筆されたものと考えられる。

以上の具體例から、『演義』には『平話』の名殘が認められる一方で、主に『三國志』及び裴松之注の記述が利用されていることが明らかとなった。そして、このことは「呂布敗走下邳城」「白門樓曹操斬呂布」の二段全體にわたっても言えることなのである。〔表一〕に『演義』の本文と歴史書とを比較した結果を示した。この表は、『演義』の本文で歴史書を利用していると思われる箇所を全て抜粋し、そのエピソードがどの歴史書に存在するかを○で示し、さらに、文面がほぼ一致している場合には網掛けで示したものである。『平話』にも似たエピソードが存在する場合は、その内容にも觸れた。一見してわかるように、やはりこの二段には『三國志』と裴松之注の文面が多用されている。この二段については、『平話』を土臺としながら、『三國志』（裴松之注を含む）の記述を流用して執筆するというプロセスがとられたことは間違いあるまい。

〔表一〕葉逢春本第二卷第十三段「呂布敗走下邳城」・第十四段「白門樓曹操斬呂布」と歴史書との比較結果

| | 該當箇所 | 内容 | 三國志 本文 | 三國志 注 | 通鑑 | 綱目 | 平話 | 三國志該當箇所 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 呂布敗走下邳城 | | | | | | | |
| | 51a l.7「却説」～「逃難」 | 劉備が一人小沛を逃れる | | ○ | ○ | ○ | | 卷32 蜀書 先主傳 |
| | 51b l.2「玄德」～l.3「兵也」 | 劉備が曹操に身を投じる | ○ | ○ | ○ | | | |
| | 51b l.8「布與」～l.9「兗州」 | 藏霸たちが呂布に付く | | | ○ | ○ | | |
| ① | 53b l.10「陳宮」～l.12「水者」 | 呂布が陳宮に策を求める | | ○ | ○ | ○ | | 卷7 魏書 呂布傳 |
| ② | 54a l.5「布曰」～l.7「全也」 | 陳宮が呂布に怒る | | ○ | | | | |
| | 白門樓曹操斬呂布 | | | | | | | |
| ③ | 54a l.4「宮曰」～l.7「而破」 | 陳宮が策を獻じる | | ○ | ○ | ○ | 策の内容は演義と同じ | |
| ④ | 54b l.2「昔操」～l.5「不出」 | 呂布の妻が引き止める（1） | | ○ | ○ | ○ | 演義で妻が話す臺詞は、平話では貂蟬が話す臺詞と似ている | |
| ⑤ | 54b l.8「將軍」～「其糧」 | 呂布自ら糧道を斷とうとする | ○ | | ○ | | | |
| ⑥ | 54b l.10「將軍」～l.16「不決」 | 呂布の妻が引き止める（2） | | ○ | ○ | ○ | | |
| ⑦ | 55b l.1「術曰」～l.5「破也」 | 呂布が袁術に助けを求める | | ○ | ○ | | | |
| ⑧ | 56a l.7「次日」～l.8「晝戟」 | 呂布が娘を背負って城を出る | | ○ | ○ | | | |
| | 56b l.1「却説」～l.4「去了」 | 張楊が部下楊醜に殺される | ○ | | ○ | ○ | | 卷8 魏書 張楊傳 |
| | 56b l.7「荀攸」～l.10「拔也」 | 兵を退こうとする曹操を荀攸が止める | ○ | | ○ | ○ | | 卷10 魏書 荀攸傳 |
| ⑨ | 56b l.16「侯成」～57a l.7「斬之」 | 侯成が酒を飲もうとして呂布に打たれる | | ○ | ○ | | 酒は關係ないが打たれる | 卷7 魏書 呂布傳 |
| ⑩ | 57a l.9「時宋」～l.15「計策」 | 侯成と宋憲・魏續が謀反を計畫する | ○ | | ○ | | 侯成一人が謀反 | |
| ⑪ | 58a l.4「布叫」～l.10「默然」 | 呂布が曹操の前に縛り上げられる | ○ | ○ | ○ | ○ | 演義と似ている | |
| ⑫ | 58a l.13「操曰」～58b l.5「回顧」 | 曹操が陳宮を斬る | ○ | ○ | ○ | ○ | 演義と似ている | |
| ⑬ | 59a l.3「後曹」～「甚厚」 | 曹操が陳宮の母妻娘を手厚く待遇する | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| ⑭ | 59a l.4「操送」～l.10「縊死」 | 呂布を殺す | ○ | ○ | ○ | ○ | 演義と似ている | |

## 二

さて、呂布の最期の二段では、歴史書が利用されている箇所についてはほぼ全てが『三國志』及び裴松之注に據っていたが、『演義』には他にも『綱目』という歴史書が多用されていることが、上田望氏の研究によって明らかになってきている。ここからは、比較的『綱目』が多用されている「劉先主興兵伐吳」～「八陣圖石伏陸遜」（葉逢春本第七卷第十八段～二十四段）の七段をとりあげて、『綱目』がどのように利用されているのかを詳しく見ていく。劉備が關羽の仇討ちのために大軍を興して吳に攻め入り、吳の陸遜に敗北を喫するまでを描いたくだりである。例えば、以下に擧げたエピソードは孫權と諸葛瑾の絆

の深さを語るものであるが、『演義』の文面は『綱目』に據っている（「吳大夫趙咨說曹丕」）。

（葉）權曰、「子瑜決不負孤。彼與孤有生死之交、不易之誓。子瑜之不負孤、猶孤之不負子瑜也。昔者子瑜在柴桑時、孔明至吳、孤與子瑜曰、『卿與孔明同產、何不留之。』子瑜言、『亮已委質於人、義無二心。弟之不留、猶瑾之不往也。』孤審子瑜往日之說、其言貫通肺腑、以此論之、子瑜今日焉得負孤降蜀乎。此惟孤知其心、非外人可知也。」

（三）時或言瑾別遣親人與備相聞、權曰、「孤與子瑜有死生不易之誓、子瑜之不負孤、猶孤之不負子瑜也。」

（注）『江表傳』曰、瑾之在南郡、人有密讒瑾者。…（中略）…權報曰、「子瑜與孤從事積年、恩如骨肉、深相明究、其爲人非道不行、非義不言。玄德昔遣孔明至吳、孤嘗語子瑜曰、『卿與孔明同產、且弟隨兄、於義爲順、何以不留孔明。孔明若留從卿者、孤當以書解玄德、意自隨人耳。』子瑜答孤言、『弟亮以失身於人、委質定分、義無二心。弟之不留、猶瑾之不往也。』其言足貫神明。今豈當有此乎。孤前得妄語文疏、卽封示子瑜、并手筆與子瑜、卽得其報、論天下君臣大節一定之分。孤與子瑜、可謂神交、非外言所間也。…」（卷五十二　吳書七「諸葛瑾傳」）

（資）時或言瑾別遣親人與漢主相聞者、權曰、「孤與子瑜有死生不易之誓、子瑜之不負孤、猶孤之不負子瑜也。」…（中略）…權報曰、「子瑜與孤從事積年、恩如骨肉、深相明究、其爲人非道不行、非義不言。玄德昔遣孔明至吳、孤嘗語子瑜曰、『卿與孔明同產、且弟隨兄、於義爲順、何以不留孔明。孔明若留從卿者、孤當以書解玄德、意自隨人耳。』子瑜答孤言、『弟亮已失身於人、委質定分、義無二心。弟之不留、猶瑾之不往也。』其言足貫神明。今豈當有此乎。前得妄語文疏、卽封示子瑜、并手筆與之。孤與子瑜、可謂神交、非外言所間。…」（卷六十九　魏紀一　文帝黃初二年）

（綱）時吳人或言瑾別遣親人與漢相聞者、權曰、「孤與子瑜有死生不易之誓、子瑜之不負孤、猶孤之不負子瑜也。」…（中略）…權報曰、「玄德昔遣孔明至吳、孤嘗語子瑜曰、『卿與孔明同產、何不留之。』子瑜言、『亮已委質於人、義無二心。弟之不留、猶瑾之不往也。』其言足貫神明。今豈當有此乎。孤與子瑜、可謂神交、非外言所間。…」（卷十四）

『三國志』裴松之注と『資治通鑑』の網掛け部分は『綱目』で省略されており、同じ部分が『演義』にも無い。また、波線部は『三國志』裴松之注と『資治通鑑』は「何以不留孔明」、『演義』と『綱目』は「何不留之」とそれぞれ一致している。二重傍線部も『三國志』裴松之注と『資治通鑑』では「弟亮以失身於人、委質定分」（『資治通鑑』は「以」が「已」になっている）、『演義』と『綱目』では「亮已委質於人」とそれぞれ一致している。このように、『演義』と『綱目』は文面が悉く一致しているのである。

ここで一つの疑問が生じる。このエピソードについて、何故『三國志』及び裴松之注ではなく、あえて『綱目』が利用されたのだろう

〔表二〕葉逢春本第七卷第十八段「劉先主興兵伐吳」～第二十四段「八陣圖石伏陸遜」と歴史書の比較結果

| | 副題 | 該當箇所 | 内容 | 三國志 | | 通鑑 | 綱目 | 三國志該當箇所 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 本文 | 注 | | | |
| | 劉先主興兵伐吳 | 66a l.12「陳震」～67a l.6「信之」 | 李意が劉備の伐吳の吉凶を占う | | ○ | | | 卷32 蜀書 先主傳 |
| | 吳大夫趙咨說曹丕 | 68b l.6「先主」～l.7「朕也」 | 劉備が關羽を失ったことの怒りを吐く | | ○ | | | |
| ※ | | 68b l.7「瑾曰」～l.14「思之」 | 諸葛瑾が兵を収めるよう劉備を説得する | ○ | | ○ | ○ | 卷52 吳書 諸葛瑾傳 |
| | | 69a l.3「權曰」～l.9「知也」 | 孫權は諸葛瑾は自分を裏切らないと斷言する | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | | 69b l.4「魏主」～70a l.1「勝敗」 | 曹丕が吳の使者趙咨に孫權の人柄を尋ねる | ○ | ○ | ○ | ○ | 卷47 吳書 吳主傳 |
| | | 70a l.3「如是」～l.4「九錫」 | 曹丕が孫權を吳王に封じる | ○ | | ○ | ○ | 卷2 魏書 文帝紀 |
| | | 70a l.4「劉曄」～l.8「察之」 | 劉曄が曹丕に諫言する | | ○ | ○ | ○ | 卷14 魏書 劉曄傳 |
| | | 70a l.8「魏主」～l.10「用之」 | 曹丕が劉曄の意見を否定する | | ○ | ○ | | |
| | | 70a l.10「劉曄」～70b l.3「大悔」 | さらに劉曄が曹丕に諫言する | | ○ | ○ | ○ | |
| | | 70b l.3「魏主」～l.5「多言」 | また曹丕が劉曄の意見を否定する | | ○ | ○ | | |
| | | 70b l.9「顧雍」～l.11「損也」 | 孫權が劉邦の故事を引き合いにして魏からの封命を受ける | | ○ | ○ | ○ | 卷47 吳書 吳主傳 |
| | | 70b l.11「乃率」～「迎接」 | 孫權自ら魏の使者邢貞を迎える | ○ | | ○ | ○ | 卷55 吳書 徐盛傳 |
| | | 70b l.12「不下」～l.14「下車」 | 邢貞の無禮な振る舞いに張昭が怒る | ○ | | ○ | ○ | 卷52 吳書 張昭傳 |
| | | 70b l.15「一人」～71a l.3「者也」 | 徐盛が自己の無力を歎く | ○ | | ○ | ○ | 卷55 吳書 徐盛傳 |
| | | 71a l.3「權受」～l.6「喚之」 | 孫權が曹丕に珍物を獻上する | | ○ | ○ | ○ | 卷47 吳書 吳主傳 |
| ※ | 關興斬將救張苞 | 71b l.3「「吳人」～l.6「五歲」 | 吳將孫桓の人となり | ○ | ○ | | | 卷51 吳書 宗室傳 |
| ※ | | 71b l.10「乃朱」～l.11「義封」 | 吳將朱然の人となり | ○ | | | | 卷56 吳書 朱然傳 |
| | | 72a l.15「前隊」～73a l.13「戰馬」 | 蜀將吳班らの軍が吳將李異らの軍を破る | ○ | | ○ | ○ | 卷32 蜀書 先主傳 |
| | | 74b l.1「却說」～l.2「餘所」 | 劉備が巫峽から夷陵まで七百里に連營する | ○ | | ○ | ○ | 卷58 吳書 陸遜傳 |
| | 劉先主猇亭大戰 | 76a l.3「是時」～l.4「猇亭」 | 二月、劉備が猇亭を取る | ○ | | | | 卷32 蜀書 先主傳 |
| | 陸遜定討破蜀兵 | 79b l.13「遜乃」～l.15「將軍」 | 陸遜の人となり | ○ | ○ | | | 卷58 吳書 陸遜傳 |
| | | 80a l.10「吳王」～l.11「假節」 | 孫權が陸遜を大都督に命じる | ○ | | ○ | ○ | |
| | | 80b l.3「周泰」～l.7「出矣」 | 諸將は孫桓への援軍を勸めるが陸遜は無視する | ○ | | ○ | | |
| | | 80b l.11「諸將」～81a l.5「死戰」 | 旧將韓當らは若い陸遜に從わない | ○ | | ○ | ○ | |
| | | 81a l.5「陸遜」～l.12「多言」 | 陸遜は「從わぬ者は處分する」と戒める | ○ | | ○ | ○ | |
| | | 81b l.5「先主」～「關隘」 | 劉備自ら軍を率いて吳軍に挑む | ○ | | ○ | ○ | 卷32 蜀書 先主傳 |
| | | 81b l.9「韓當」～l.16「不伏」 | 韓當は劉備を討ちに出擊しようとするが、陸遜は妄りに動くことを禁じる | | ○ | ○ | ○ | 卷58 吳書 陸遜傳 |
| | 劉先主夜走白帝城 | 82b l.13「陸遜」～83a l.14「破之」 | 吳班が吳軍に挑むが陸遜は伏兵を見破る | ○ | | ○ | ○ | |
| | | 83a l.14「諸將」～83b l.2「破也」 | 「劉備を攻める時期を誤った」と諸將が陸遜を責める | ○ | | ○ | ○ | |
| | | 83b l.5「陸遜」～l.13「百拜」 | 陸遜から孫權への手紙の内容 | ○ | | ○ | ○ | |
| | | 84a l.1「黄權」～l.6「諸軍」 | 黄權が劉備に對して前線に出ないよう諫める | ○ | | ○ | ○ | 卷43 蜀書 黄權傳 |
| | | 84a l.10「魏主」～l.3「東吳」 | 曹丕は曹仁・曹眞・曹休を吳に進擊させる | ○ | | ○ | ○ | 卷2 魏書 文帝紀 |
| | | 85a l.13「却說」～85b l.5「請罪」 | 陸遜が蜀營へ攻擊を試みるが敗れる | ○ | | ○ | ○ | 卷58 吳書 陸遜傳 |
| | | 85b l.5「遜曰」～l.7「破之」 | 陸遜が蜀を破る法を思いつく。諸將は兵の無駄死にを避けるよう願い出る | ○ | | ○ | ○ | |
| | | 85b l.11「每人」～86a l.13「白日」 | 陸遜が火攻めで劉備の陣營を破る | ○ | | ○ | ○ | |
| | | 86a l.14「馮習」～l.15「射死」 | 馮習は吳軍に殺される | ○ | | ○ | | |
| | | 86b l.3「前到」～l.6「而下」 | 劉備は馬鞍山に逃げ陸遜の軍に圍まれる | ○ | | ○ | ○ | |
| | | 86b l.13「先生」～l.14「後軍」 | 劉備は部下に鎧を燃やさせ後路を斷つ | ○ | | ○ | | |
| | 八陣圖石伏陸遜 | 87a l.6「此時」～l.9「帝城」 | 趙雲が助けに來て、劉備を白帝城へ護送する | | ○ | | | 卷36 蜀書 趙雲傳 |
| | | 87b l.2「時傳」～l.5「之中」 | 蜀軍の將傳彤の死に際 | ○ | | ○ | ○ | 卷45 蜀書 傳彤傳 |
| | | 87b l.8「祭酒」～l.11「而亡」 | 蜀軍の將程畿の死に際 | ○ | | ○ | ○ | 卷45 蜀書 程畿傳 |
| | | 87b l.14「時張」～88a l.4「降吳」 | 張南・馮習・摩沙柯（沙摩柯）は吳軍に敗れ、杜路・劉寧らは吳に投降する | ○ | | ○ | | 卷58 吳書 陸遜傳（張南馮習は卷32 蜀書先主傳にもあり） |

か。『三國志』及び裴松之注の方が詳しい記述があるのだから、そちらを利用した方がよさそうなものではないか。この問題、つまりそれぞれの歴史書がどのような意圖で使い分けられたのかという問題に關しては、從來論じられることがなかった。しかし、これは『演義』の執筆プロセスに於ける重大な問題であり、單にどの歴史書が『演義』に利用されているかという點にとどまることなく、考察を深める必要があろう。二重傍線部の「亮已委質於人」に關しては、『三國志』裴松之注と『資治通鑑』が「失身於人、委質定分」としているのを『綱目』が「委質於人」に書き改めているのは、蜀を正統とする立場からであり（諸葛亮や劉備の評價に不利益となる表現を改めている）、一見、『演義』も同じ理由から『綱目』の「委質於人」を採用したとも考えられる。しかし前後のその他の異同についてはそのような説明はできないので、やはり正統の意識とは關係なく、別の理由が存在する筈である。

そこで、先と同じ要領で作成した〔表二〕を參照されたい。まず、文面の一致を示す網掛けがかなり分散しており、『三國志』及び裴松之注に據っている部分と『綱目』に據っている部分が入り混じっていることに注目される。さらに分析すると、『綱目』に據っているのは諸葛瑾・孫權・張昭・曹丕・劉曄といったこの段のサブキャラクター的な人物に關わるエピソードであり、一方、『三國志』（裴松之注を含む）に據っているのは、ほとんどがこの段の主要人物である陸遜に關わるエピソードとなっていることがわかる。[5]陸遜に關わるエピソードは『資治通鑑』とも一致している場合があるが、『演義』全體にわたって『資治通鑑』の影響が非常に少ないこと、また『資治通鑑』のような詳細な編年體の文章から陸遜に關わるエピソードだけを漏らさず拔粹して『演義』に採り入れるのは困難であろうことを鑑みると、やはり『三國志』（裴松之注を含む）の方が利用された可能性が高い。またこの段に限らず、「一」でとりあげた呂布の最期の段に於いても、前掲の〔表一〕からわかるように、主要人物である呂布に關するエピソード（表中①～⑭）はほぼ全てが『三國志』「呂布傳」の本文及び裴松之注の文面に一致している。

この狀況からまず考えられるのは、『演義』の原作者は『三國志』（裴松之注を含む）と『綱目』を見比べながら、主要人物については『三國志』（裴松之注を含む）、サブキャラクターについては『綱目』の記述を採用したという可能性である。しかし、『平話』を目の前に廣げ、さらに『三國志』（裴松之注を含む）と『綱目』を見比べ、それらの記述を複雜に組み合わせて『演義』のような大部の小説を執筆するという作業は大變困難なものと豫想されるが、そのような作業が白話小説の黎明期、講史小説執筆のノウハウも無かった時代に一人の人間の手によって可能であったか、疑問の念を禁じえない。

むしろ、主要人物は『三國志』（裴松之注を含む）、サブキャラクターは『綱目』に據るという傾向がこのようにはっきりと出ている以上、『三國志』（裴松之注を含む）と『綱目』はそれぞれ別の段階で、別の人間によって、別の用途で利用されたと考える方が自然ではなかろうか。この場合、考えられる可能性は二通りである。第一に考えられるのは、まず『平話』を土臺として、主要人物に關わるエピソードを『三國志』（裴松之注を含む）に據って肉付けした最初の『演義』が執筆され、後の段階で何者かがそれを『綱目』と照合し、サブキャラクターに關わるエピソードを增補したという執筆プロセスである。逆に『綱目』が先に利用され、『三國志』（裴松之注を含む）が後に利用されたと考えるならば、第二の可能性として、まず『平話』と『綱目』を使って

全體の構成が整った『演義』が執筆され、後の段階で主要人物に關わるエピソードが『三國志』（裴松之注を含む）に據って詳しく書き換えられたという執筆プロセスが考えられる。

では、『三國志』（裴松之注を含む）と『綱目』はどちらが先に利用されたのか。確かに、歴史を時間軸に沿って追った小説を書こうとするなら、まず『綱目』のような編年體の歴史書が必須とされるようにも思われる。實際、明代の通俗歴史小説は『綱目』と『節要』（これも『資治通鑑』の節本で、諸家の注を多く付したもの）を融合させた『綱鑑』[6]の影響を受けて成立したとされてきた。しかし考えてみれば、『平話』が既にある程度史實の時間軸に沿ったものとなっているのだから、それに『三國志』（裴松之注を含む）で肉付けすれば、ある程度歴史の時間軸に沿った小説が完成するのであって、『綱目』のような編年體の歴史書が必要不可欠というわけではない。現に「一」で見た呂布の最期の二段などは、『平話』に『三國志』「呂布傳」及び裴松之注で肉付けして、いくらかの創作を交えて書かれており、記述内容の點からも構成の點からも、『綱目』は全くと言ってよいほど必要とされていない。この關羽の弔い合戰のくだりについても、『平話』は陸遜と呂蒙の二人で劉備を撃退するという『演義』とはかなり異なった展開となってはいるものの、やはり『平話』に『三國志』（裴松之注を含む）で肉付けして執筆されたと考えることは充分可能である。しかも、『綱目』に據っているエピソードはストーリーに何ら影響を與えない、極端に言えば、無くても成立するようなものばかりなのであるから、これらは小説に興を添えるために後の段階で增補されたものとも考えられる。とすると、第一に擧げた執筆プロセス、つまり、まず『平話』を土臺として『三國志』（裴松之注を含む）に據って肉付けした最初の『演義』が執筆され、後の段階で『綱目』に據って增補されたという執筆プロセスが最も適合するのではないか。

無論、現段階ではどちらの執筆プロセスがとられたのか明確に斷定することは難しい。しかし、『演義』は段階的に執筆されたのではないかという、これまで論證されることがなかった問題について考える絲口とはなり得る筈である。

## 三

さて、ここまで幾度となく言及してきたように、『演義』の作者はゼロからこの小説を執筆したのではなく、基本的には『平話』を下地としている。ただし、『演義』には『平話』に存在しないくだりも多々存在する。それらはどのようにして執筆されたのだろうか。例えば、吳の孫策の活躍を描いた「孫策大戰太史慈」「孫策大破嚴白虎」（葉逢春本第二卷第五段・六段）の二段は、孫策が劉繇・笮融・薛禮・嚴白虎といった周辺勢力を次々と破り、名だたる名士・名將を從え、江東の若きリーダーとして臺頭する過程を描いたくだりであるが、このような話は『平話』には存在しない。それどころか、『平話』には孫策の名さえ出て來ないのである。この場合、『平話』は『演義』執筆の參考にはなり得ず、『平話』を下地として歴史書で肉付けするという執筆プロセスは成り立たない。では、この段はどのような手法で執筆されたのだろうか。

まず、この段の中核を爲す部分、つまり最も盛り上がりを見せるのは、副題にもなっている通り、孫策が太史慈と出會い主從關係を結ぶ部分であるが、これは作者による創作などではなく、歴史書に由來するエピソードである。〔表三〕にこれまでと同じ要領で『演義』と歴

〔表三〕葉逢春本第二卷第五段「孫策大戰太史慈」・第六段「孫策大破嚴白虎」と歴史書との比較結果

| | 副題 | 該當箇所 | 内容 | 三國志 本文 | 三國志 注 | 通鑑 | 綱目 | 三國志該當箇所 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 孫策大戰太史慈 | 17b l.10「玄德」～18a l.15「和好」 | 劉備が廣陵へ逃げるが袁術軍に負け、呂布が劉備を招く | ○ | ○ | ○ | ○ | 卷 32 蜀書 先主傳 |
| | | 18b l.1「元來」～l.5「視術」 | 孫策が父を亡くして以後、袁術との關係 | ○ | | ○ | ○ | 卷 46 吳書 孫策傳 |
| | | 18b l.5「術視」～l.6「而回」 | 孫策が陸康を破って袁術の元に歸る | ○ | | ○ | ○ | |
| | | 18b l.6「當日」～l.7「轉悶」 | 袁術が孫策の官位を上げない | ○ | | ○ | ○ | |
| | | 18b l.9「忽見」～l.14「志也」 | 朱治が孫策に江東を取ることを勸める | ○ | | ○ | ○ | 卷 56 吳書 朱治傳 |
| | | 19a l.4「次日」～l.12「便行」 | 孫策が袁術に兵をかして欲しいと賴む | ○ | ○ | ○ | ○ | 卷 46 吳書 孫策傳 |
| | | 19a l.13「前至」～ 19b l.6「濟矣」 | 孫策が歴陽で周瑜と再會する | ○ | | ○ | ○ | 卷 54 吳書 周瑜傳 |
| | | 19a l.15「劉繇」～ 20a l.1「之弟」 | 劉繇の人となり | ○ | | | | 卷 49 吳書 劉繇傳 |
| ① | | 20a l.5「帳下」～l.9「而退」 | 太史慈が先鋒を願い出るが却下される | ○ | | ○ | | 卷 49 吳書 太史慈傳 |
| | | 20b l.4「盡得」～l.5「軍器」 | 孫策が牛渚を攻め、戰利を上げる | | ○ | ○ | | 卷 46 吳書 孫策傳 |
| ② | | 20b l.7「孫策」～ 22a l.3「歸寨」 | 孫策の十三騎と太史慈が神亭ではち合う | ○ | | ○ | ○ | 卷 49 吳書 太史慈傳 |
| ③ | 孫策大破嚴白虎 | 22b l.3「太史」～「去了」 | 太史慈は涇縣へ逃れる | ○ | | | | |
| | | 22b l.6「當先」～l.7「不下」 | 孫策が秣陵城の薛禮を攻める | | ○ | | | 卷 46 吳書 孫策傳 |
| | | 22b l.8「劉繇」～l.15「王也」 | 牛渚を襲った干糜・樊能を孫策が破る | | ○ | | | |
| | | 23a l.2「孫策」～l.12「伏業」 | 孫策が流れ矢で死んだふりをして秣陵の薛禮を破る | | ○ | | | |
| ④ | | 23a l.12「進涇」～ 24a l.3「伏之」 | 太史慈が孫策に降伏する | ○ | ○ | | | 卷 49 吳書 太史慈傳 |
| | | 24a l.4「江東」～l.11「曲河」 | 孫策が江東の民を平定する | | ○ | ○ | ○ | 卷 46 吳書 孫策傳 |
| | | 24a l.11「策領」～l.13「守關」 | 嚴白虎と鄒太守（鄒他）・王晟が連携する | | ○ | | | |
| | | 24b l.11「次日」～ 25a l.3「餘杭」 | 嚴白虎の弟嚴興（嚴興）が殺される | | ○ | | | |
| | | 25a l.6「一人」～l.9「而歸」 | 虞翻が王朗に嚴白虎を討つよう勸める | ○ | | ○ | ○ | 卷 57 吳書 虞翻傳 |
| | | 25b l.1「孫權」～l.5「傷了」 | 宣城で孫權が賊に攻められ、周泰が守る | ○ | | | | 卷 55 吳書 周泰傳 |
| | | 25b l.8「策先」～l.9「功曹」 | 孫策が虞翻を功曹に命じる | ○ | | ○ | ○ | 卷 57 吳書 虞翻傳 |
| | | 25a l.12「策曰」～l.13「共之」 | 孫策が虞翻に言う臺詞 | | ○ | | | |
| | | 25b l.12「問之」～l.13「元化」 | 華佗の人となり | ○ | | | | 卷 29 魏書 方技傳 |

史書を比較した結果を示しているが、孫策と太史慈の物語に關わる記述、表中①②③④は、全てが『三國志』及び裴松之注に見えるエピソードであり、文面も高い確率で一致している。例えば、④は孫策が太史慈を捕らえた場面であるが、このエピソードは『資治通鑑』と『綱目』には存在せず、『三國志』及び裴松之注にのみ存在する。以下に網掛けで示したように、文面がほぼ一致している上、それ以外の部分も、言い回しがやや異なっているだけで内容はほぼ完全に一致している。

（葉）策把慈手曰、「寧識神亭時乎。若公是時獲我、還相害否。」慈荅曰、「未可量也。」英雄之意⑦。策大笑曰、「今日之事、當與公共之。」請入寨中、邀之上坐、待以酒食。策曰、「今日既與相虞、勿憂不如意也。願教進取之策。」慈曰、「敗軍之將、不可與論。」策曰、「韓信昔日求謀於廣武。策今決疑於仁者、公何辞焉。」慈曰、「州軍新破、士卒離心。若倘分散、難以再聚。欲自往収拾、以歸明公、恐不合尊意。」策長跪於地曰、「誠本心所望也。明日日午、望来還。」慈應諾、不辞出寨而去。諸將皆曰、「太史慈此去、必不来矣。」策曰、「子義乃襄中名士、信義為重。必不肯負義也。」衆皆未信。次日、立竿看日影、却好正中、慈引一千餘人到寨。衆皆伏之。

（三）策卽解縛、捉其手曰、「寧識神亭時邪。若卿爾時得我、云何。」慈曰、「未可量也。」策大笑曰、「今日之事、當與卿共之。」

（注）○『吳歴』云、…（中略）…策素聞其名、卽解縛請見、咨問進取之術。慈答曰、「敗軍之將、不足與論事。」策曰、「昔韓信定計於廣武。今策決疑於仁者、君何辭焉。」慈曰、「州軍新破、

士卒離心。若儻分散、難復合聚。欲出宣恩安集、恐不合尊意。」策長跪答曰、「誠本心所望也。明日中、望君來還。」諸將皆疑。策曰、「太史子義青州名士、以信義爲先、終不欺策。」明日、大請諸將、豫設酒食、立竿視影。日中而慈至、策大悅、常與參論諸軍事。（卷四十九　吳書四「太史慈傳」）

この二段の中核を成す孫策と太史慈のエピソードが『三國志』（裴松之注を含む）にしか無いということは、作者はこの段を執筆するにあたり、まず初めに『三國志』（裴松之注を含む）の孫策と太史慈のエピソードを讀み、物語の着想を得たものと考えられる。ちなみに表中②は『三國志』裴松之注だけでなく『資治通鑑』とも文面が一致しているが、先ほどから述べているように、『演義』には『資治通鑑』の影響はほぼ無いと見られるので、やはり『三國志』裴松之注の方に據っていると見てよいだろう。『綱目』に至っては文面の一致不一致という問題以前に、記述があるのが②のみであり、對象となり得ない。

この二段全體に於いても、『綱目』にはエピソード自體が存在しない場合が多く、文面が一致していると斷定し得るのはわずか二例のみとなっている。ただし、見過ごすべからざる點は、ストーリーの流れ、つまり時間軸の觀點から『演義』と『綱目』を比較してみると、兩者の時間軸がぴたりと一致していることである。この二段の主要人物である孫策と太史慈に關わる記述は『三國志』の「孫破虜討逆傳」（孫策傳）と「太史慈傳」に分散しているため、もし『三國志』（裴松之注を含む）だけを參照してこの段を執筆しようとするならば、「孫破虜討逆傳」（孫策傳）と「太史慈傳」に散らばった記述を組み合わせてストーリーを構築せねばならない。それがたまたま『綱目』の時間軸と一致したとは考えにくい。呂布の最期や關羽の弔い合戰の段のように、『平話』に『三國志』及び裴松之注で肉付けすればある程度歷史の時間軸に沿った物語となる場合とは違い、『平話』のような下地となる物語が存在しない以上、史實の時間軸に沿った物語を書こうとするならば、『綱目』のような編年體の歷史書が必須となるのである。以上のことから、作者はこの段を執筆する際、まず『三國志』（裴松之注を含む）から着想を得て、『綱目』のような編年體の歷史書を參照して時間軸を構成し、さらに『三國志』（裴松之注を含む）に據ってエピソードを盛り込むという作業を行っていたものと推定される。『綱目』と『三國志』及び裴松之注を組み合わせながら小說を執筆するという複雜な作業は、『演義』という大部の小說全體を執筆する上では不可能と思われるが、この段のように部分的にであれば可能であろう。

そもそも、この孫策の物語は『演義』の中でいわばサイドストーリー的な性格を有している。劉備の活躍を描いた物語とは全く別のところで、本筋に何ら影響を與えることなく、平行して進行する物語なの

〔表四〕

| 敵役 | 歷史書の記述（便宜上『三國志』のみを擧げる） | 『演義』の記述 |
|---|---|---|
| 劉繇・笮融 | 孫策に敗れた後、劉表を恃んで逃げる。後、二人で仲間割れを繰り廣げ、笮融は劉繇に敗れて山中に逃げ込み、土民に殺される。劉繇は最後は病死。<br>『三國志』卷四十九　吳書第四「劉繇傳」 | 孫策に敗れた後、二人まとめて山中で土民に殺される。<br>「劉繇・笮融去投拜劉表、後皆在山中劫掠、被鄉民所殺。」 |
| 薛禮 | 後に劉繇・笮融との仲違いで死ぬ。<br>『三國志』卷四十九　吳書第四「劉繇傳」 | 孫策との亂軍中で死ぬ。<br>「薛禮死於亂軍中。」 |
| 嚴白虎 | 孫策軍と朱治に敗れたとあるだけで、死に方について特に記述無し。<br>『三國志』卷四十六　吳書第一「孫破虜討逆傳」<br>『三國志』卷五十六　吳書第十一「朱治傳」 | 孫策に敗れた後山中に逃げ込み、一度土民に殺されそうになる。後、道中で童謠にだまされて死ぬ。<br>「於路劫掠、被土人凌操引鄉兵殺敗、望會稽而逃。」<br>「是夜於帳中飲酒、那人拔劍砍殺嚴白虎。」 |

である。このことは、劉繇をはじめ笮融・薛禮・嚴白虎といった孫策の敵役の人物が、この段にしか登場せず、しかも哀れなほどに杜撰な死に方に描かれ、この段の中で片づけられていることからもうかがわれる。〔表四〕に比較しているように、歴史書では劉繇・笮融・薛禮は孫策の攻撃から逃れ、その後三人で仲間割れを繰り廣げるとあるのに對し、『演義』では孫策に敗れてすぐ山中で土民に殺されたり、孫策との亂軍中で死んだりしている。嚴白虎に至っては、山中に逃げ込んで土民に殺されかけるという、劉繇・笮融と同じパターンが流用されている。劉繇・笮融・薛禮・嚴白虎については、無理矢理にでもこの段の中で完結させようという意圖が感じられるのである。この二段は、前後のストーリーに影響を與えてはならないという條件下で執筆されたものなのではなかろうか。

以上のように、この「孫策大戰太史慈」「孫策大破嚴白虎」の二段は、『綱目』と『三國志』（裴松之注を含む）を同時に併用して執筆されたもので、呂布の最期や關羽の弔い合戦のような段階的に執筆されたと考えられる『演義』本筋の段とは執筆の手法そのものが異なっている。さらに、内容的にも前後の段から明らかに浮いている。これらの事實は、この二段が元來『演義』には存在せず、『演義』の本筋とは別に、何者かによって創作され、挿入されたものであることを示しているのではないか。しかも筆者の調べたところでは、この二段に限らず、呉の人物が活躍する段、例えば「孫權合肥大戰」（葉逢春本第五卷第十段）、「張遼大戰逍遙津」「甘寧百騎刼曹營」（葉逢春本第六卷第十四段・第十五段）に於いても同様の傾向が認められた。それらの詳しい結果は本論では割愛するが、このことは、呉の人物が活躍する段が別個に創作され挿入された可能性を示唆しているといえよう。

この説が正しいならば、この部分の作者は劉備を中心とする物語の本筋を書いた作者とは別の人間ということになる。何者かが、劉備の活躍にとどまっていた初期の『演義』を讀み、小説としての更なる充實を圖って、呉が活躍する物語を創作し、挿入したのかもしれない。或いは、商業目的で書房が率先して増補したという可能性も考えられよう。

## 結論

以上のことから、『演義』が完成するまでの過程、その執筆プロセスが明らかとなってきた。まず、元の至治年間（一三二一―一三二三）に建陽の虞氏から『平話』が刊行されたが、これは歴史書からかけ離れた記述を多々含んでいた上、大變簡略な物語であり、讀み物としては不完全なものであった。そこで、何者かが、主要人物については『三國志』（裴松之注を含む）を參照し、時には自らの創作を交えながら、『平話』を發展させたようなものを執筆した（ただし「一」でも述べたように、今日傳わる『平話』そのものではなく、似たような内容を持つ別の書物を下地とした可能性もある）。次の段階で、サブキャラクターに關するエピソードが『綱目』に據って増補され、内容的にも充實し、歴史をかなり忠實に追った物語となったのである。或いは、まず『平話』と『綱目』を利用して全體の構成を整えた『演義』が執筆され、次の段階で『三國志』（裴松之注を含む）に據って主要人物に關わるエピソードが詳しく書き換えられた可能性も否定はできない。さらに、呉の人物が活躍する段は、『三國志』（裴松之注を含む）と『綱目』を同時に併用して執筆されており、『演義』の本筋とは別に何者かによって創作され挿入された可能性がある。ここにようやく、現在の『演義』とほぼ

同じような記述を備えた『三國志演義』が完成されるのである。

この仮説が正しいならば、『演義』は突如として文學史上に誕生したのではなく、段階的に成立したということになろう。段階的に成立したということは、その都度、作業に關わった人物や書坊が存在するということでもある。では、現在『演義』の作者とされている羅貫中は、いったいどの段階に關わった人物なのだろうか。

葉逢春本卷頭に置かれた、嘉靖二十七年、鍾陵の元峰子なる人物が記した「三國志傳加像序」（「三國志傳」は『三國志演義』の別名）には、羅貫中について次のような記述がある。

三國志、志三國也。傳、傳其志。…（中略）…志者何、述其事以爲勸戒也。傳者何、易其辭以期徧悟。…（中略）…而羅貫中氏則又慮史筆之艱深、難於庸常之通曉、而作爲傳記。

（「三國志」とは、三國について記したものである。「傳」とは、その「志」に解釋をつけたものである。…（中略）…「志」とは何か。あるできごとを述べて、忠告・戒めとすることである。「傳」とは何か。言葉を變えて、わかりやすく述べることである。…（中略）…羅貫中氏は、歴史を述べる筆法が晦澁難解で、平凡な知識では理解し難いことを案じ、傳記とした。）

この內容を總合すると、「三國志傳」つまり『演義』とは、「『三國志』をわかりやすい言葉を使って書き換えたもの」であり、その作業を行ったのが他でもない羅貫中ということになる。本論で仮定した執筆プロセスで言えば、『平話』に『三國志』及び裴松之注で肉付けして『演義』を執筆した人物に該當しよう。無論、白話小說の序は單なる商賣文句を竝べていることもあり、無批判にこの序を信じることはできない。また、序が書かれた時點で既に二百年近く前の人物であった羅貫中の行跡について、正しく傳わっていたかどうかという問題もある。しかし少なくとも、この序が書かれた明・嘉靖年間には、『演義』の原作者についてこのような認識が存在したということは確かである。

そうしてできあがった最初の『演義』を讀んだ者、おそらくは高級知識人とは言えないが民間の文化に慣れ親しんだ文人、或いは書坊が、各々手を加えながら、段階的にこの小說を完成させたのであろう。本論で論じたように、各段階で作業に關わった人物たちは、『平話』に『三國志』（裴松之注を含む）で肉付けするという手法、『綱目』に據ってエピソードを增補するという手法、『三國志』（裴松之注を含む）と『綱目』を併用するという手法、それぞれ異なったプロセスで執筆したものと推定される。どの執筆プロセスに於いても、より史實に近づけよう、より充實した讀み物にしようという動機でもって筆が執られたのであろうが、それぞれが利用した歴史書は異なっていたり、その利用の仕方も異なっていた。この小說が手探りの中で發展させられていった過程がうかがわれる。

注

（1）上田望「講史小說と歴史書（一）―『三國演義』、『隋唐兩朝史傳』を中心に―」（『東洋文化研究所紀要』　東洋文化研究所　一九九三）第二章。拙論「『三國志演義』の原初段階における成立と展開―段階的成立の可能性―」（『和漢語文研究』第九號　京都府立大學國中文學會　平成二十三年十一月）。

（2）（1）に前掲した拙論八七～九〇頁で詳しく論じている。

（3）嘉靖本より葉逢春本の文章の方が古い『演義』に近いという問題については（1）に前掲した拙論でも詳しく論じている。歴史書を利用して

いない部分の文章についても、小松謙「『三國志演義』の成立と展開について―嘉靖本と葉逢春本を手がかりに―」（『中國文學報』第七十四册平成十九年）で葉逢春本の方が古い『演義』の本文を殘していると指摘されている。

（4）金文京『三國志演義』の世界』（東方書店　一九九三）四六～五三頁。

（5）ただし表の※部分のような、人となりを紹介する部分や手紙の内容といった部分（諸葛瑾が劉備を説得する臺詞も『演義』では臺詞だが『三國志』では手紙の文章である）については、サブキャラクターに關するものでも『三國志』に據っている。しかしこれらはいわば注釋に近い性格のものであり、さらに後の段階で增補されたものではないかと考えられるので、特例と考え、本論では問題としない。

（6）『綱鑑』の説明は（1）に前掲した上田氏の論文（一一一～一一三頁）に據る。

（7）葉逢春本の本文中「英雄之意」は、字體は前後の文章と變わらないが、意味の面から考えると注釋的なものとみられる。これは嘉靖本や李卓吾批評本、毛本などには見られないものである。